

〈オーケストラクライマックス!〉

Orchestra Climax



指揮とお話 太田 弦 Gen Ohta, conductor & speaker
 2015年東京国際音楽コンクール〈指揮〉第2位
 (The Tokyo International Music Competition for Conducting winner)

司会 朝岡 聡 Satoshi Asaka, navigator
 コンサートマスター 三浦章宏 Akihiro Miura, concertmaster

グリンカ: 歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲 (約5分)
 Glinka: "Ruslan and Ludmila" overture (ca. 5 min)

ベートーヴェン: 交響曲第7番 イ長調 op.92 より 第4楽章 (約8分)
 Beethoven: 4th movement from Symphony No.7, in A major, op.92 (ca. 8 min)

ビゼー: 組曲『アルルの女』第2番より ファランドール (約4分)
 Bizet: Farandole from "L' Arlésienne" Suite No.2 (ca. 4 min)

— 休憩 Intermission (約15分) —

チャイコフスキー: 交響曲第4番 ヘ短調 op.36 より 第4楽章 (約8分)
 Tchaikovsky: 4th movement from Symphony No.4, in F minor, op. 36 (ca. 8 min)

チャイコフスキー: 交響曲第6番 ロ短調 op.74 『悲愴』より 第3楽章 (約9分)
 Tchaikovsky: 3rd movement from Symphony No.6, in H minor, op.74 (ca. 9 min)

ラヴェル: ボレロ (約13分)
 Ravel: Boléro (ca. 13 min)

第74回

休日の 午後の コンサート



1/21(日) 14:00 開演 東京オペラシティコンサートホール

Sun. January 21, 2018, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団
 助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
 Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
 Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト: ハラダ チエ

プラボー! オーケストラ(NHK-FM 放送)にて後日放送予定



1/21

出演者プロフィール

指揮とお話 太田 弦

Gen Ohta, conductor & speaker

1994年北海道札幌市に生まれる。幼少の頃より、チェロ、ピアノを学ぶ。

東京芸術大学音楽学部指揮科を首席で卒業。学内にて安宅賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。現在同大学院音楽研究科指揮専攻修士課程に在籍。

2015年、第17回東京国際音楽コンクール(指揮)で2位ならびに聴衆賞を受賞。

指揮を尾高忠明、高関健の両氏、作曲を二橋潤一氏に師事。

山田和樹、パーヴォ・ヤルヴィ、ダグラス・ボストック、ペーター・チャバ、ジョルト・ナジ、ラスロ・ティハニの各氏のレッスンを受講する。

これまでに読売日本交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団を指揮、今後さらなる活躍が期待される若手指揮者筆頭。



プログラム・ノート

解説=柴田克彦

オーケストラクライマックス!

今回の「休日の午後のコンサート」は、「オーケストラクライマックス!」と題して、高揚感溢れる音楽が披露されます。指揮は、2015年東京国際音楽コンクール(指揮)で2位と聴衆賞を受賞した太田弦。今年まだ24歳という、「日本のバッティストーニ」の如き俊才が、若いエネルギー漲るクライマックスを聴かせます。

オーケストラ音楽のクライマックスといえば、全楽器を動員した壮大な響きが不可欠です。また、前進性や推進力、畳み込むような展開も興奮状態を導きます。今回はこうした音楽の特集です。しかも紆余曲折あって頂点に達するのではなく、ひたすら突き進みながら高揚する、「全編クライマックス」ともいべき作品が並んでいます。つまり、熱いながらも爽快で、とびきりエキサイティングな音楽ばかり。これは一見ありそうで、実は滅多にないプログラムです。

いつもならコンサートの幕開けやフィナーレ、あるいはアンコールに登場する音楽を立て続けに聴いて、オーケストラの醍醐味に浸るもよし、ストレスを発散するもよし。レアな体験を存分に満喫しましょう!

司会 朝岡 聡 Satoshi Asaoka, navigator

リコーダーを大竹尚之・吉澤実氏に師事。著書にリコーダー愛を綴った「笛の楽園」(東京書籍)。ヨーロッパのオペラ旅の魅力を写真とエッセイで綴った「いくぞ!オペラな街」(小学館)など。また、傑作オペラの物語や歌の背景を親しみのある筆致で説き、恋愛物語としての楽しさを広く伝える『恋とはどんなものかしら 歌劇(オペラ)的恋愛のカタチ』が好評発売中(東京新聞)。



横浜の山手地区の西洋館や教会を会場にしたコンサート「横浜西洋館 de 古楽」の実行委員長も務める。そのほか年間60回にも及ぶ東京都音楽鑑賞教室の司会をはじめ、毎年全国を巡る「音楽宅急便〜クロネコファミリーコンサート」、「コバケン(小林研一郎)と仲間たちオーケストラ」公演、銀座ヤマハホール〜朝岡聡の《オペラは恋の処方箋》、横浜みなとみらいホールの「ジルバスターコンサート」、東京フィルハーモニー交響楽団の「ニューイヤーコンサート」など、国内主要オーケストラ・アーティストと共演多数。日本のクラシックコンサートの顔としても活躍している。

日本ロッシーニ協会運営委員。



©上野隆文

楽曲解説

“クライマックス”を生み出す要素とは？

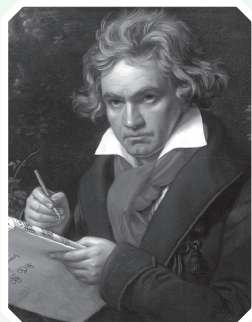
高揚効果の高い音楽を形作る主な要素は、“リズム”“反復”“音量”“速度”であるといえるでしょう。躍動するリズムは言わずもがな。そのリズムや音型、フレーズの反復は交感神経を刺激し、興奮状態をもたらします。大音量も無条件に快感を与えてくれますし、音量の増大＝クレッシェンドが加われば、効果はさらにアップ。快速テンポもそれだけで十分エキサイティングです。今回の各曲は、これらの要素が絡み合いながら激しく盛り上がります。

“ロシア国民楽派の父”格林カと
“楽聖”ベートーヴェンのクライマックス

幕開けは、“ロシア国民音楽の父”ミハイル・格林カ(1804－1857)の歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲。コンサートの開始に相応しい、ロシアを代表する名序曲です。同歌劇(1842年ペテルブルクで初演。全5幕)は、「悪魔に奪われたキエフのスヴェトザール公の娘リュドミラを、3人の騎士＝求婚者たちが救出に向かい、リュドミラは救出に成功したルスランと結ばれる」といった、民話に基づく物語。序曲は、弦楽器が駆け巡る第1主題(第5幕の婚礼の場の音楽)と流麗な第2主題(第2幕のルスラ



ミハイル・格林カ
(1804-1857)



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
(1770-1827)

ンのアリア)を軸に展開される軽快な音楽です。最大のポイントは、終始プレスト(急速)で運ばれる“速度”。作曲者自身も「全速力で疾走するような」演奏を求めており、弦楽セクションの妙技と爽快かつ華麗なサウンドを満喫できます。

2曲目は、古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770－1827)の人気作、交響曲第7番より第4楽章。第7番は、中期後半の1811～12年に作曲され、1813年12月、ウィーンにおける「戦争傷病兵のための慈善コンサート」で公開初演されました。ナポレオン軍に対する戦勝ムードの中で行われた当公演は、サリエリやフンメル等の著名音楽

家を含む100名の大オーケストラが演奏したイベント的なコンサート。明快でビートの効いた第7番はタイムリーな音楽ゆえに、生涯屈指の大成功を収めました。

9曲の交響曲1曲ごとに新たな試みを行ったベートーヴェンが、本作で打ち出したのは“リズムの徹底強調”。各楽章に設けられたリズム・パターンが、推進力や生命力を生み出します。第4楽章：アレグロ・コン・ブリオはまさにそのクライマックス。冒頭の「タンタタン」をはじめとする複数のリズム動機が登場し、開始直後の第1主題とシンコペーション風に弾む第2主題を軸にしながら、圧倒的な狂乱状態が創出されます。ここで注目したいのが、終盤のバス・オスティナート(低音による同一音型の反復)。チェロとコントラバスが4分音符の動きを繰り返しながら徐々に音量を上げ、壮絶な高揚効果をもたらします。

この曲には、前記の全要素が詰まっており、中でも“リズム”と“反復”が大きな役割を果たしています。また別の意味で特筆されるのが、今回の他の曲と違って、ティンパニ以外の打楽器やトロンボーンなどが使われていない点。ハイドンやモーツァルトの交響曲と変わらない編成によってもたらされる迫力と高揚感に、ベートーヴェンの凄さが表れています。

早熟の天才、ビゼーの熱狂的なクライマックス



ジョルジュ・ビゼー
(1838-1875)

前半最後は、歌劇『カルメン』で知られるフランスの天才作曲家ジョルジュ・ビゼー(1838－1875)の『アルルの女』より「ファランドール」。作品全体は、フランスの文豪ドレー作の3幕の劇の付随音楽で、1872年に作曲&初演されました。物語は、「農家の長男フレデリが、幼なじみの村娘と婚約しながらも、アルルの女への恋が実らないことに絶望し、身を投げる」という、南仏プロヴァンスを舞台にした悲劇。ビゼーは27曲の音楽を書き、4曲を演奏会用組曲に編曲しました(＝第1組曲)。さらにビゼーの死後、友人の作曲家エルネスト・ギロー(1837－1892)が、全4曲の第2組曲を編纂し、

以後は両組曲の形で親しまれています。

「ファランドール」は第2組曲の最終曲。最初はアレグロ・デチーゾ(決然と)。プロヴァンスの民謡「3人の王の行列」が奏され、カノンで繰り返されます。次にアレグロ・ヴィーヴォ・エ・デチーゾ(「ヴィーヴォ＝活発に」が追加)となって、村人たちが踊る民俗舞曲ファラン

ドールの旋律が、プロヴァンス太鼓に伴われて登場。その反復に前半の旋律が組み合わされ、熱狂のクライマックスを迎えます。やはり前記の全要素が盛り込まれたこの曲は、アンコールの定番にもなっています。

チャイコフスキーが “運命との闘いと勝利”を描いたクライマックス

後半最初は、ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)の交響曲第4番より第4楽章。チャイコフスキーは1877年、モスクワ音楽院の教え子ミリュウコヴァと結婚しますが、すぐに破綻し、モスクワ川で凍死を企てます。そしてロシアを脱出し、1878年4月まで西欧各地で静養しました。また同時期には、鉄道王の未亡人フォン・メック夫人から年金が約束され、フリーランスへの道が開けました。本作は、こうした激動期の1877年春に作曲が開始され、1878年1月に静養先のイタリア、サンレモで完成。同年2月にモスクワで初演され、大成功を収めました。



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)

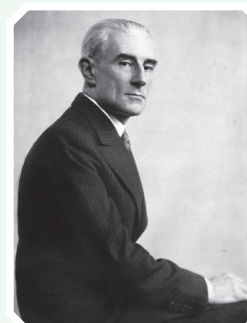
曲は、チャイコフスキーの管弦楽作品の中でもとりわけ情熱的でダイナミック。内容は、手紙の記述等から「自身の人生の苦悩を反映し、“運命との闘いと勝利”が描かれた作品」と解釈されており、第1楽章冒頭で奏されるファンファーレ風の「運命主題」が全曲の核となります。第4楽章:アレグロ・コン・フォーコ(火のように、情熱的に)は、迫力満点のフィナーレ。冒頭の激烈な第1主題、ロシア民謡「野に立つ樺の木」に基づく第2主題、活弁な第3主題が交互に登場しながら、推進力に充ちた音楽が展開されます。後半でテンポをアンダンテに落とし(本日唯一、大きくテンポが変わる部分)、運命主題が活気を遮りますが、快速テンポと圧倒的な興奮が戻って終結します。この曲も前記の要素がまんべんなく効果を発揮します。

おつぎもチャイコフスキーの人気作。交響曲第6番『悲愴』より第3楽章です。巨匠最後の作品となった『悲愴』は、亡くなる1893年に入って本格的に着手され、8月末に完成。10月28日にペテルブルクで初演されました。しかしチャイコフスキーは直後にコレラを発症し、11月6日に世を去ります。そして、この経緯と遅いフィナーレに代表される曲の

悲愴感が重なって、「死を予感した作品」との見方や自殺説が囁かれ、現在も真相は謎に包まれています。

第3楽章:アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェは、南イタリアの民俗舞曲タランテラのリズムを用いて、スケルツォと行進曲を合体させた、個性的な音楽。細かな動きのスケルツォ主題が、ダイナミックな行進曲となって突き進み、高揚を続けた末、激烈に終結します。これは、“リズム”“反復”“音量”“速度”の全ての要素が生かされた、全曲中唯一の明るく華やかな楽章。第4楽章が悲痛なトーンに終始するため、通常のフィナーレに近い役割を果たしており、以前は同楽章の後にしばしば拍手が起きていました。

フランス近代音楽が生んだ傑作「ボレロ」のクライマックス



モーリス・ラヴェル(1875-1937)

締めくくりは、フランス近代音楽の大家モーリス・ラヴェル(1875-1937)の『ボレロ』。舞踊家イダル・ルビンシテイン女史の依頼で書かれた、ラヴェル最後のバレエ音楽で、1928年に作曲され、同年パリで初演されました。バレエ自体は、スペインの小さな酒場で若い女性がボレロを踊り、最後は全員が熱狂していく……といった内容。ちなみにボレロはスペインの民俗舞曲ですが、本作はその変形です。

曲は、2小節のリズム・パターンが169回反復され、小太鼓がひたすら同じリズムを刻む中、ラヴェルの言う「スペイン＝アラビア風」の2つの主題がただ交互に繰り返されるだけ。

調性も基本的にハ長調のまま変わらず、管楽器を中心にリレーされるソロや各種のブレンドによる音色の妙と、曲全体に及ぶクレッシェンドのみで変化がもたらされます。本日唯一遅め(ボレロのテンポ。モデラート・アッサイ)の曲ですが、“リズム”“反復”“音量”の効果をこれほど巧みに活用した音楽は極めて稀。“管弦楽の魔術師”の面目躍如たる1曲です。

Follow UP!

交響曲の
“クライマックス”は
どこにある？

交響曲の終楽章は、盛り上がるように書かれているのが通例。ベートーヴェンの第7番のような猛進し続けるタイプでなくとも、同作曲家ならば第5番『運命』や第9番『合唱付』、ベルリオーズの『幻想交響曲』、ブラームスの第1番、第2番、マーラーの第1番『巨人』、第5番、シベリウスの第2番、ショスタコーヴィチの第5番などは、興奮度MAXで終結し、いやが応にも盛大な喝采が巻き起こります。しかし一方で、チャイコフスキーの第6番『悲愴』やマーラーの第9番、あるいはベートーヴェンの第6番『田園』のように、音響的なピークが1つ前の楽章に置かれている作品も、少ないながら存在しています。そうした中、ひどく変わっているのが、実はドヴォルザークの第9番『新世界より』。この曲の終楽章は、結構盛り上がりながら、最後の最後は管楽器の伸ばした音だけが残し、しかも *ppp* (ピアノニッシモ) まで弱められます。超有名曲なのに、交響曲史上稀なこの不思議な終結……望郷の念を込めた等の推測も成り立ちますが、作曲者に意図を聞いてみたいものです。



ドヴォルザークの第9番『新世界より』
終楽章(最終部分)

しばた・かつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座を行うなど、幅広く活動中。近著に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。